

「長期調査」に関する若干の問題

著者	石川 淳志
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会労働研究
巻	16
号	2
ページ	67-83
発行年	1970-01-15
URL	http://doi.org/10.15002/00006295

「長期調査」に関する若干の問題

石川 淳志

いま私の手許には大へん興味深い論文四篇がある。いずれも、長期間にわたってある特定の地域社会を調査する過程でえられた体験・感想などを書き綴った論文である。だが、あるいは論文などというところの執筆者たちから逆に文句をいわれるかもしれない。なぜならそれらは、みな有斐閣発行のPR誌「書斎の窓」に連載されたもので、科学的な調査報告ではなく、また自己の調査の体験の一般化を意図した調査方法論でもなく、時には一部にそうした内容とスタイルも含みながら、全体としては調査中に経験した出来事や、調査者自身の気持などを随筆風に書き綴った、いわゆる「調査にまつわる話し」であるからである。おそらくこれらの「話し」は、最終的にまとめられる調査報告書には採録されない調査の副産物であろう。またこうした調査者の喜びと悲しみといった類の話しは、単なる研究者の自己満足を示すだけのものであり、本来報告書にはもちろん、とくに他人に面白おかしく語る筋合いのものではないかもしれない。

しかし私は、これらの「話し」をたとえ自己の内部だけであろうと、少しずつ集積していくその過程自体に尽きな

野		
昭和37年11月	No. 106	A 1
37年12月	No. 107	A 2
38年 1月	No. 108	A 3
38年 3月	No. 109	A 4
38年 4月	No. 110	A 5
38年 6月	No. 112	A 6
38年 7月	No. 113	A 7
41年 1月	No. 139	A 8
(A 9欠)		
41年 5月	No. 142	A 10
41年 6月	No. 143	A 11
41年 7月	No. 144	A 12
41年 8月	No. 145	A 13
埼		
昭和38年 8月	No. 114	B 1
38年10月	No. 116	B 2
38年11月	No. 117	B 3
39年 1月	No. 118	B 4
39年 2月	No. 119	B 5
39年 3月	No. 120	B 6
39年 4月	No. 121	B 7

興味と共感を覚える。そして本来社会科学の「手段」であるべき社会調査が、あたかもそれ自体一個の特殊科学として自己目的的に対象化しうるような気持にさえ時には陥入るのである。だがこんな私の気持はともかくとして、これら長期調査の過程でえられた調査報告書には書かないはずの調査の話し、些細な調査中の出来事、あるいは調査目的とは直接関係のない調査中のエピソードなどがなぜ面白いのかを、「長期調査」という調査方法の問題と関連させて考えてみることは必要であろう。もちろん研究過程自体において研究者を魅了するいわゆる研究の醍醐味などをいままさら説くつもりはないし、またその資格さえ私にはない。だがこのことによつて逆に、形式的精緻化の途を進んで内容的に空洞化しつつある昨今の社会調査そのものを、方法的にとらえ直す緒が見出されるかもしれないと思うからである。その意味でこのノートは、通常の調査報告書においては行間に潜んで直接表面には現われぬ調査者の貌をばからずも顕現してくれた資料をもとに、調査自体ないし調査方法を裏側からもう一度見直そうと意図するものである。なおここで扱う論文四篇は、中野卓「長期調査」(A)、柿崎京一「参与的観察調査」(B)、米地実「長期総合調査」

米		地	
昭和39年7月	No. 124	C 1	
39年8月	No. 125	C 2	
39年10月	No. 126	C 3	
39年11月	No. 127	C 4	
39年12月	No. 128	C 5	
40年1月	No. 129	C 6	
40年3月	No. 130	C 7	
40年4月	No. 131	C 8	
40年5月	No. 132	C 9	
40年6月	No. 133	C10	
40年7月	No. 134	C11	
40年9月	No. 135	C12	
40年10月	No. 136	C13	
40年11月	No. 137	C14	
40年12月	No. 138	C15	
黒		崎	
昭和41年10月	No. 146	D 1	
41年11月	No. 147	D 2	
41年12月	No. 148	D 3	
42年1月	No. 149	D 4	
42年2月	No. 150	D 5	
42年3月	No. 151	D 6	
42年4月	No. 152	D 7	
42年6月	No. 153	D 8	
42年7月	No. 154	D 9	
42年8月	No. 155	D10	
42年9月	No. 156	D11	
43年1月	No. 159	D12	
43年2月	No. 160	D13	
43年3月	No. 161	D14	
43年4月	No. 162	D15	
43年6月	No. 164	D16	
43年7月	No. 165	D17	
43年8月	No. 167	D18	
43年9月	No. 168	D19	
43年10月	No. 169	D20	

(C)、黒崎八州次良「僻地長期調査」(D)である。掲載誌の発行年月と引用の際の略記号をはじめに表示しておく。

一

まずわれわれは、行論の順序として「長期調査」の意味について考えることからはじめよう。中野は、このシリーズの冒頭で「長期調査」の定義をつぎのように述べている。

長期調査とは現地調査継続期間の長期にわたるものを指すのであるが、長期といっても全調査期間中ずっと現地に滞在し続けて調査を継続することはまれで、「普通はむしろその期間内で最少限前後二回、たいていは数回、またそれ以上の時点(あるいは小期間)に、時日を、または年月を隔てて、それぞれ、現在時点における同一調査対象(地域社会でも階層構造でも、人々の意識や行動の仕方等々何にもせよ、それ)が、いかなる推移を示すか、その変化なり持続なりにおける諸要因、諸条件の規則的な連関を明らかにするため、計画的に反復される一連の現地調査を長期調査と呼ぶのである」(A1)。

ここで長期調査の「長期」とは現地調査継続期間の長さを意味するとされているが、しかしその基準は不明確であ

るし、さらにもっと基本的な問題として、単なる調査期間の長短は調査の本質的相違をあらわすものではないことを考えるならば、むしろこの定義で示される「長期調査」の特徴は、最少限二日以上数回にわたって同一対象に対して計画的に反復される一連の現地調査、というところにあると思われる。事実中野によれば、二回以上数回にわたり、大なり小なりの間隔をおいて調査を実施するということは、単に時間や費用などの点からの制約によるものではなく、つぎのような理由からむしろ積極的な意味で採用されるべき調査手続きであるという。すなわち第一に、時をおいてあらためて調査をおこなう方が、そのたびに新鮮な眼で対象の変化（あるいは不変化）に驚くことができ、そのため一層鋭く事態の推移とその意味を見てとることができるからであり、また第二に、現地を離れ、集取してきた資料の整理・分析をおこないながら考えを練り、その回の現地調査にそれなりのまどめをつけてみると、多少とも当初と比べて理論的な発展もえられ、ただ調査洩れの発見という以上に、それにもとづき補足調査を要する点、将来に予測される変化を次回に追跡すべき点、また過去へ向っても文献や聴取りにより溯及を要する点などがはつきりとし、これによって当初からの長期調査計画を修正したり、次回の調査計画を一層整備し具体化することができるからである、と（A1）。

しかしこの点に関しては、後にCを執筆した米地のつぎのような批判的見解がある。

「調査期間は長短いずれであれ、当初立案した計画通りに結果——当初の仮説を肯定するか否定するかではなく——が出る迄調査は継続すべきであることは勿論であり、当初計画を達成することが調査にとっては最も必要である。長期調査は当初の計画において決定することであり、途中、新たな問題の発見展開による調査の長期化は結果として長期調査に転化したものであり、当初、長期調査」として計画したものとはおのずから意味が異なる」（C1）。

だがリンドの「ミドルタウン」なども典型的な長期調査であると考えられるが、前後二回の調査においてはそれぞれ

れ現地居住による連続的長期調査がおこなわれながら、しかも両者を併せたミドルタウン研究全体もまた、十年の間隔をへだてた「長期調査」の結果もたらされたすぐれた成果であることを思えば、新たな問題の発見展開による「結果としての長期化調査」も、ここでいう長期調査のなかに当然包含されてよいであろう。そしてさらに中野の指摘するごとく、長期調査における「間隔」の積極的意義も、その意味であらためて首肯することができよう。

なお中野は、結果として長期化された「やむをえない長期調査」の具体例として、自分の「商家同族団の研究」をあげている。

昭和十八年の春休みと夏休み、かれは十二月の学徒出陣をひかえて「生きているうちに出来る最後の仕事と考へ」京都の旧家をめぐり商家同族団の調査に没頭した。

「戦時下町々の大小の商家いずれも企業統制、労力不足、そして住込使用人もろとも食糧不足等々にあえいでいるなかで、家と家族、および、家族同様に^レしているという住込み雇傭関係の家における意味、そして、その都市の家々が、その家なるものの内部構造のもつ本質のままに、^レ山奥の辺鄙なところにだけ残存している特殊な例外的現象^ヲ、だともいわれていた。同族団へ、おのずから展開することが、当時までの日本の社会において、直接には日本の都市において持っていた民族文化の歴史における意味を、かぎだそうとして歩きまわっていた。商家同族団についてのすぐれた研究が既にあり、私は都市商家の暖簾分けの意味を、都市・村落を通じて存在する同族団と不可分なものと見当付けてこれを確かめようとしていたのであった(A2)。

しかし調査研究は途中で中断され、残した資料もほとんど戦災で焼失するが、かれが戦地から引揚げてきた二年半後にふたたび再開される。

「再開してみると、この調査は、やむをえず、結果的に戦前・戦中・敗戦直後の三つの時期を調査対象時期として、戦中と戦後とを实地調査時点とする長期調査となるに至った。またその戦中時点の調査は、その間に、そのなかで行なわれた戦前という対象時期が、別な、もう一つ前の時期として溯及的に拡大されていき、これは、近世後期と、明治の前半、そして明治後期から大正を経て昭和の初期にかけての時期、というように区別されるようになっていった。……

近世から明治初期にかけて、明治後期から昭和初期にかけて、また第二次大戦中、そして敗戦直後、これらの大きく条件を異

にした四つの主要な時期は、私の暖簾内と商人社会の研究にとつて前の二つの時期には実地に立会うことができなかったにせよ、あとの二つの時点はそれを調査時点として歴史の大きな進行のなかで相違した諸条件のもとに、暖簾内の変貌と崩壊を見とけさせてくれたのである。(A2)

なおこのようにやむをえず中絶したにもかかわらず、その中絶期間中に生じた大きな歴史的变化によって、はからずも比較対照する時点を内部に包含するにいたつた長期調査の例はかなり特殊であろうが、その他にも、あらかじめ先に相対的な完結性をもつ調査がおこなわれていて、後にそれを追跡しようとして新たに研究が企てられるばあい、先行調査自体を第一段階としてあらためて長期調査のなかに包摂するケースも、先の米地のような批判はあるが、やはり「長期調査」としてよいであろう。たとえばリンダのミドルタウンがそれであるし、わが国では有賀喜左衛門が戦前の石神村調査(「南部二戸郡石神村における大家族制度と小作制度」昭和十四および「日本家族制度と小作制度」昭和十八年)以後十数年を経た農地改革後、再び同村を調査してその変化を追求した例(「大家族制崩壊以後」昭和三十三年)もある(A6)。中野はさらに、異なった研究者による問題追求をも継続性という視点から長期調査の中に加え、その例としてギヤルピンからコルプに受け継がれたワルワース郡のルーラル・コミュニティ研究や、あるいは戦前における戸田貞三の家族研究を継承して戦後さらに家族構成の変化を跡づけた小山隆などをあげている(A6)。しかしここでは一応、同一研究者による同一対象の反復的調査だけを長期調査として考えることにする。その意味では、「長期調査は研究者の研究主題が変らない限り、研究者自身の研究史そのものである」(C1)といういい方もまた可能であろう。だがいづれにしても、長期調査はいうまでもなく調査一般に対しても、「調査が一応完結したあとでも、また、ときをおいて再調査したくなるような調査を、いつでもどこでもやっておきたいものである」(A6)

という感想には私自身大いに反省させられるところがあり、またその意味で、現地に「一週間乃至十日間滞在し、それで調査地を二度とおとずれることがない調査法に対して」の「長期調査」(C1)の意義もあらためて認識されなければならぬであろう。

なお先の中野の長期調査の定義からすれば、統計的方法によるパネル調査なども当然長期調査の範囲に含まれることになる。その点については中野もとくに触れてはおらず、単に「めまぐるしく何でも動くこの現代日本であるだけに、この長期調査法は一層有益であるように思われてならない。なにも全てについて長期調査法でなくてはならないなどと言うつもりはないが、横断的調査法の盛んなわりに縦断的調査法の少ないのは片手落ちという以上に、物の見方を広めるに偏して深めるのに欠けはしまいかと心にかかる」(A1)として、横断的方法に対する縦断的方法の有効性から、そのなかの長期調査の必要性について説いているだけである。しかしAをはじめB・C・Dの各論稿とも、いずれも具体的な調査例としてあげている長期調査の手続きは「事例的方法」によるものである。長期調査は先の定義からしても必ずしも事例的方法によるものだけとはかぎらないが、事例的方法は長期調査によってこそ真にその効果をあげうることもまた事実である。このノートで以上「長期調査」といふばあいには、一応事例的方法による長期調査を意味することに限定しておこう。

二

ところで、「間隔」をむしろ積極的な必要条件とした長期調査にとつては、「時をおいて改めて調査を行なう方が、そのたびに新鮮な眼でその変化(或は不変化)に驚くことができ、そのため一層鋭く事態の推移とその意味を見てと

ることが出来る」(A1)という指摘をまつまでもなく、調査対象の「変化」を追求するところにこそ真面目があらわれるのは当然である。この点に関連して中野はさらに、「変化」を追求する長期調査が、その過程で三つの方向に拡大する要求をもつにいたることを述べてつぎのようにいう。

① 現地調査の行なわれる二時点、あるいは数回、数十回に及ぶ各時点の間に見出される変化が、「実験室」のなかではなく、「現地」で見出されるものである限り、その地域社会なり、その特定問題なりの示す変化は、大なり小なり歴史的な変化のなかに位置づけられる性質の変化であるから、研究者としては、しぜん、それぞれの調査時「現在」における「現地」の状況をとらえるだけではなく、たいていは、その「現地」の、より古い過去へも溯及して、過去を足場に現在が生れ出るそのなりたちによって現在のしくみを一層深くつかみたいという気になる。

② その調査時現在から見て、将来へ向つても、テーマとしている問題点の解明に必要なかぎりは、調査計画を延長してでもそれをとらえなければならなくなりうる。当初の計画から充分それを見込んで立てられなければならないことは言うまでもないが、当初予測しえなかつた問題点の発見、それ以上に、発生が、当初よりのテーマの答を出すためにも、さらに追求調査の反復実施をしばしば要求する。

③ それは計画の時間的延長だけでなく、社会の拡大という一般的な変化の傾向のために、地域社会の調査では「現地」のもつ空間的なひろがりから従って比喩的に言えば同心円的に調査対象地を拡大し、或は重点をおく調査地点を周辺へ移動する要求ともなりうる。

すでに「孤立した小地域社会」というものを、方法的にでも予定して研究にかかるといふようなことはむつかしくなってきた今では、「現地」の範囲自体はそれ自体すでにあらかじめ拡大している。それを過去へ溯及的に立入つてゆくこと次第に、それぞれの小地域社会の孤立性は強くなる。たしかに、拡大し外へ大きく開かれていく現代の「現地」社会にしても、なかば開かれたものとなりつつなお併立した小地域社会の数多くを、実はその中に内包しつつづけていく。「現地」の社会は長期——それこそ調査開始をはるかに溯る長期にわたつて拡大しつつ、時にはその各時期に、地点から他地点へ、一つの問題点から他の問題点へ、焦点となる問題の所在を移して来ている。もしこれらの推移についての問題をとこうとする場合には、「長期調査」は、それが対象とする期間の各時点に関して、対象における焦点、対象地における中心地点を移す必要に迫られよう。これらすべての理由

は、いよいよ長期の調査計画を要請してくるのである。(A1)

引用が若干長くなつたが、調査対象の変化を解明するため、調査の範囲を過去へ向つて溯及させ、同時に将来においても反復的に追求調査をおこない、さらに調査地点を移動させてより一層深い究明をおこなうことの必要性はよく理解できるであらう。

ここで中野は、「過去への溯及」という問題についてさらにつぎのようなただし書きをつけている。

……長期調査における各国の現地調査では、いつでも現在時点に関する調査が行なわれる。それは溯及調査を含むときにもそれを含まない場合と同様である。これは社会学的調査の特徴の一つであらう。現地調査における、過去へ向つて溯及する調査の部分は、現地の文書記録を主な資料として行なわれ、現在時点における観察や聴取はその補助手段とならう。しかし、この際、社会学的な研究では、このような溯及的研究においても、それに基本的分析視角を与えるのは、現在時点における調査対象となっている歴史的・社会的な現実の構造・機能、また、それらの変動過程に関する調査の成果であり、同時に、これを発掘し遂行させている問題意識である。(A1)

たしかに社会学が歴史学とは異なる一特殊科学であるかぎり、過去の時点へ溯つて対象の解明をおこなうばあいに、現在時点の調査研究とは関連のない、それ自体完結したものとして扱われることはない。ただ対象が、特定の歴史的過程を経た結果として現在時点における構造・機能を示すにいたつたがゆえに、過去への溯及をおこない、その理解を深めるのである。リンドがミドルタウン調査において一八九〇年という対比年次を設定したのも、一九二五年現在の行動・思考様式を理解するためであつた。中野が能登灘浦調査において師台網創始の記録を発掘したのも、現在の地域社会構造とその鍵となる漁業権の構造を解明する目的からであつたし(A4)、米地が長野県南真志野区において氏神信仰の歴史の変遷を辿つたのも、祭祀組織と地域社会の政治・経済構造の関連を究明し、村落生活の総合的

解明を目指しながら日本人の精神史に関する新しい角度からの資料を提供しようとしたからであった(C1)。いま私はこれらの調査内容やその成果を論評するつもりはないし、また解明すべき問題の選択それ自体があらわしている調査者の問題意識を云々するつもりもない。ここではただ調査手続きとしての「過去への溯及」が意味するところを理解し、「人間が歴史的な現実としてしかありえない社会をつくるものであり、そういう社会において社会的人間としてつくられるものでもある」(A7)かぎり、現代の社会を歴史的にとらえようとする一つの方法として長期調査のもつ意義はきわめて大であろうと考え、また「社会変動を具體的にとらえて歴史の意味を社会学的に掴むのには最も有効な方法」(A4)という主張もある程度理解できるように思う次第なのである。

また長期調査における「将来への反復的追求」という問題についても、対象の「変化」を究明しようとするかぎり、その必要性はいうまでもないところであり、さらに特定の調査が一応の完結をみた後でも、時に応じて対象の変化を辿ってみることは、研究者として当然もつべき要請であろう。

この点に関して中野は、対馬漁村調査の話の中で「一時点における構造のなかには変化がはらんでいるのが当然で、変化をはらんでいない現実はないのだから、もしそれを自己完結的であるかの如くとらえる方法をとる人、そのようにとらえるのが構造的な把握なのだと思える人だったとしても、次の時点に現われる「構造」を知りたいと思うのがあたりまえなのではないか。こうして全てのまともな社会調査は、長期調査になる可能性をもっているのではあるまいか」(A3)と述べ、遠隔地のため漁業改革前後の村落構造を比較してその変化を跡づけることのできなかった対馬調査のばあいを、心残りをもってふりかえっている。「全てのまともな社会調査は長期調査になる可能性をもつ」という際の「まともな」ということがいかなる内容を意味するのかははっきりしないが、しかしここでは「構造」自体が

変化をはらむものであること、その意味で変動過程における構造の分析とその把握こそがもっとも重要な課題であること、したがって構造を問題にする調査はある意味で長期調査となる必然性をもつものであること、などは認められてよいであろう。(ここでも「構造」の理解の仕方を云々するつもりはない。この点については、とくに村落構造などを念頭においたばあい、千葉正士「構造の概念と構造論の方法」都立大学「人文学報」第一八号一九五八年が参考になる。)

つぎに「調査地点の移動」という問題であるが、特定の調査対象における変化を解明するために、「社会の拡大という一般的な変化傾向」に照応して調査地点を移動する必要がある、という指摘は調査論としてユニークである。調査対象の比較究明といっても、ほとんど関連のない二地点ないしそれ以上の地点をとりあげ、むしろその相違点を強調することによって対象を際立たせる調査例は多い。しかし、すでに孤立した小地域社会というものを方法的にでも予定して研究にかかることがむづかしくなっている現在「現地」の範囲はそれ自体あらかじめ拡大していること、また「現地」の社会は長期にわたって拡大しつつそれに照応して一定地点から他地点へ、ある問題点から他の問題点へと焦点となる問題の所在を移してきていること、などの理由によって調査地点の移動が必然化されるという意義づけはあらためて考慮されなければならない問題点であろう。

中野がこのように考えるにいたった動機は、おそらくかれが平行して調査を進めていた能登と佐渡の関連を発見したことによるものであろう。最初かれは単なる比較研究の意味からだけ能登と佐渡の鋤網漁村落構造を平行的に調査していたが、後に、両者には密接な関連があつて漁業技術はもちろん能登から佐渡に入漁して永住するにいたつたものもあることを知り、あらためて両者の関連を通じて一層その理解を深めることができたのであつた(A5・7・

8)。

また同じく中野が指摘するように、九学会連合による一連の共同調査研究も、「一面、インターデイシプリナリな人間生活研究の方法についての長期研究であった。他面、それは内容的にも、対馬では、日本の北、大陸文化との関係を、奄見では南、海上よりの道」を、そして、対馬海流にそって、能登・佐渡と北上し、下北に至る、というように離島・半島をたどって、日本の中央の文化に対し、いわば周縁地帯に土着の日本の文化を分布・伝播・接触・変化をめぐって探求する長期調査計画であった」(A7)ということができよう。

さらに、北海道の僻地部落を長期にわたって調査している黒崎が、部落の人びとの三、三代前の入殖者の前住地香川県下をおとすれ、あらためて両者の関連を種々考察したのもこの例である(D14・15)。

これらはいずれも同一時点における異なった地域の単なる比較研究ではなく、焦点となる問題の時間的・地域的推移に応じた調査対象地の拡大的移動を意味する。このかぎりにおいてわれわれも、長期調査がその一部に調査地点の拡大的移動を含むものであることを諒承する。

三

ここでいう長期調査は、インテンシヴな事例的方法として展開されるものであるが、逆にまた事例的方法は長期調査においてこそ真にその効果を發揮しうるといえよう。調査対象を全体関連的にきめ細かく究明し、諸事象の内的連関を因果的にとらえようとする事例的方法においては、短期間の、しかも一回かぎりの調査ではどうしても不十分な部分が残されてしまうからである。また調査期間の長期化にともない、調査対象との親密なラポールの形成も、デー

タ集取そのものに多大の影響を与えずにはおかない。一々例をあげるときりがないが、ここで扱った四篇の論文の随所に、そうした具体的事実が興味深いエピソードとともに述べられている。だがいわゆるラポールの形成は、データの集取に影響を与えるだけなのであろうか。普通の「よそ者」では決して手に入れることのできない事実や資料を集収したり、あるいは観察を成功させたりするためにだけラポールが必要なのであろうか。もちろんそれも重要であろう。たとえば柿崎が部落の寄合に出席させてもらい、議事内容の進展につれて席順の変化してゆく状態を克明に観察し図示した事例などは、興味深い雰囲気描写とともに、実に見事な長期調査の成果であると思う(B3・4)。また黒崎が僻地調査にとりかかってから五年目に貴重な資料を見る機会に恵まれ、「宝の山」にやっとたどりついた喜びを語っているのも長期調査ならではの感懐であらう(D6)。

だが問題は、単にデータ集取の可否にあるだけではないように思う。この点に関して米地は、「調査では何よりも具体的な事実の蒐集が必要であるが、具体的事実がそのまま科学的資料となるわけではない。各特殊科学の立場により選択され、整理され、組織されたものが資料となるのである」(C1)と述べ、さらに有賀のつぎのような記述を紹介している。

「特殊科学の立場に於ては、その立場を無視して、最初から総括的、総合的な立場は在り得ない。これを無視する場合にその研究資料の把握が精密さを失うに至るのである。何となれば研究資料は包括的なる生活事象の内から選択され、整理され、組織されたものが真の意味の研究資料となるのであるから、資料は単に散漫な生活事象ではない。若しそれが粗雑であるとすれば、それは研究者自身の科学的意図が対象に向かって確実に滲透しないからである。他の言葉を以てすれば、資料は単に客体的な存在ではなく、主体的・客体的であると言ひ得る。主体と客体との緊密な結合なしに優れた研究は在り得ない。研究者の精緻なる科学者の立場に依り組織され得る場合に、正確なる研究資料の蒐集が出来るので、その研究は初めて精細となり、真に具体的、

現実的であると言ひ得る。これに於ては、厳密にそれ自身の立場を堅持するから、他の立場との混同は在り得ない。」（日本上代の家と村落「昭和一八年、C一」所収）

この引用文においては有賀も米地も各特殊科学的立場を強調するところに論旨をおいており、またその「立場」というものも単に経験科学的客観性を志向する研究者の態度を指すものと思われるが、しかもなお、具体的事実がそのまゝ科学的資料となるのではないこと、研究資料は包括的な生活事象のなかから選択され、整理され、組織されたものであること、またその意味で資料は単に客体的な存在ではなく、「主体的・客体的」な存在であること、などの指摘は考慮すべき問題点として採りたいと思う。

そのばあい当然のことながら「主体的」とはいつても、調査者個人の勝手気ままな考えによる恣意的なデータ集取が許されてよいはずはない。そこにはやはり科学的立場に依拠した主体の介在がなければならぬまい。だがそれにしても、いかなる具体的事実を資料として選択するかを決定する「主体」、およびそのあり方を規定する「立場」が、長期調査によってどのような利点をうるかというのをもう少し検討してみなければならぬだろう。

社会調査においては、事実を資料として選択するという過程のなかに、すでに対象に対する一定の分析・抽象・概括が包含されている。たとえそれが意識的におこなわれようと無意識のうちであると、何らかの形でこうした一連の手続きがとられているがゆえに、何を選択し、何を棄却するかが決定されていくのである。その意味で社会調査は、余剰資料が限定されている対象以外、調査過程において常に分析・抽象・概括といった作業をくり返しながら進めなければならぬものである。とくに地域社会の総合的調査などのばあい、対象の総合性に照応して、こうした傾向が一層いちじるしくなることはいうまでもあるまい。

とするならば、社会調査の過程自体のなかに、すでに対象に対する理解の深化がおこなわれつつあると考えなければならぬ。ことに対象の全体関連的総合的究明を目指す事例的方法においては、諸事実の内的連関を次第につきとめながら、さらにまたつぎの段階における新しい事実を資料として選択する過程の積み重ねがどうしても必要である。それは当初計画の不十分さとか、仮説の不当性とかの問題ではなからう。むしろこうした調査における計画は、そのような過程を見込した上で、一つの調査の内部でも仮説―検証―仮説―検証……のくり返しを必須とする形態において立案されなければならないのではなからうか。その意味からいっても「長期調査」の必要性は当然主張されてしかるべきである。つまり調査の長期化は、一面で対象理解のより一層の進展をもたらし、収集すべき資料の幅と深さにきわめて多大の影響を与えずにはおかないからである。

たとえば柿崎の「参与的観察」における部落の老人によるウシの訓練とその意味、および動力耕耘機の導入によって誘発された家族内の緊張とその解決策を描いた「ウシと動力耕耘機」(B5)や、あるいは藁草刈作業を観察する過程でいつのまにか雨男にされてしまった「雨男になった話」(B7)などは、長期調査でなくてはうることのできない対象理解の幅と深さを十分に示した「話し」というべきであろう。これらはウシ飼育の意味や藁草刈作業の詳細な観察とともに、部落の人びとに対する理解と心情的つながりの深さをも示し、一連の掲載論稿のなかでもとくに興味深く読むことができたものの一つである。

おそらくこのような調査者が現地調査期間中に経験した出来事とか、あるいは直接調査目的には関係のない調査中のエピソードとかに関するいわゆる「調査の話し」は、学問的にまとめられた調査報告書には記載されることがないであろう。だがそれらが生かされて興味深く感じられるのは、単なる出来事の面白さとか経験のめずらしさなどではな

く、それ自体が対象理解の深化の過程に位置づけられ、われわれをして筆者とともにその過程を追体験させるからであると思われる。

その意味では、調査の目的は対象の解明にあるとはいふものの、解明されるべき対象の全体像は、解明の過程自体と分ち難く結びついているといわなければなるまい。言葉を換えていえば、「問いと答え」の関係に表明されたものだけを取りあげることが、はたして調査者の正しい態度かどうか一考してみる必要があるのではなからうか。「問い」に対する「答え」は、すでに対象自体のありのままの姿というよりは、その人為的再構成を示すものとさえいふことができる。「答える必要があるから答えを作るのであり、普段は別にもっと不明確な何かもやしたものとしてあるのかもしれない」(C5)という感想も、また「……そこにある村人の生活をその生活というレベルで理解しようとすることは、容易なことではない。安直な方法はない。調査はわれわれの都合に合わせて計画されてはならない。村人の歩調に合わせて進めてゆかねばならない」(C10)という反省も、ともに対象解明の「過程」と、その過程自体のなかにおける対象理解の深化の問題としてあらためて考えてみなければならぬのではなからうか。

もちろん質問紙などによる調査方法を否定しているわけでは決してない。ただ、わかりきったことではあるが、質問紙などによってえられた回答は、対象を一つの形式によって切ったばあいの対象の一部分の姿なのであって、その全体的解明はなお他の方法も含めて総合的になされなければならない、というだけなのである。対象を構成する諸要素を分解・分析して認識するばあい、質問紙などによる方法がさまざまな点で有効性を発揮することは言を俟たない。だがその「下向」の過程における手段としてだけ調査があるのではない。調査の目的たる対象の「解明」ということのなかには、諸要素間の内的連関をつきとめ、ふたたび対象を総合的に構成しなおして認識する「上向」の過程も当

然含まれている。事例的方法による長期調査の狙いは、むしろこの総合的過程たる「上向」を最初から強く意識しながら、しかもなお分析的過程たる「下向」の途を摸索するところにあるといえるのではあるまいか。あらかじめ操作主義的に対象を諸要素に分析しても、畢竟その「妥当性」を究極的に保証することはできない。とすれば、はじめから対象の全体の構成を意識的に考慮し、それとの関連で、いかなる要素を要素として設定すべきかをむしろ調査過程で徐々に見究めながら調査を進める方法は、その手探りの泥臭ささのために一見「科学性」において劣るように見えるながら、なお積極的な対象認識の一つの方法といふべきであらう。

(未完)